

さんかくぶちしんじゅうきょう

三角縁神獣鏡とは？

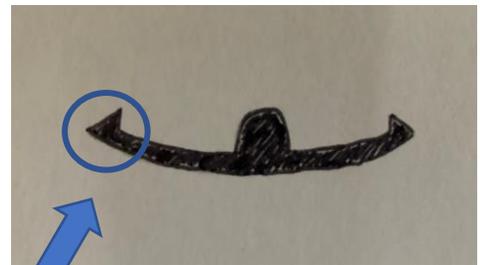
三角縁神獣鏡は、銅鏡の形式の一種で、縁部の断面形状が三角形状となった大型神獣鏡です。日本の古墳時代前期の古墳から多く発掘され、面径はおおよそ20～23cm前後程度です。

～名前の由来～

鏡の縁の断面部分が三角形になっており、背面の模様「神と獣」が刻まれている解釈から名付けられました。



群馬県立歴史博物館提供



三角形 断面図

～三角縁神獣鏡の出土地域～

三角縁神獣鏡は、畿内を中心として国内の広い範囲で出土しています。東日本では17個の三角縁神獣鏡が出土し、そのうちの12個は群馬県で出土しています。

～三角縁神獣鏡が出土した川井稲荷山古墳～

尾崎喜左雄教授の研究室が群馬県玉村町にある川井稲荷山古墳（芝根7号）を昭和43年3月24日～4月7日まで発掘調査を行い、昭和43年4月3日に三角縁神獣鏡を発掘しました。当時、調査担当者も鏡が石室外から出土するとは予想もしていませんでした。三角縁神獣鏡の他にも、埴輪などが採取され、ガラス製小玉、鉄刀なども出土しました。この古墳の築造は古墳時代の前期にあたる4世紀末ごろと推定され、6世紀になって再利用されたことが判明しています。